

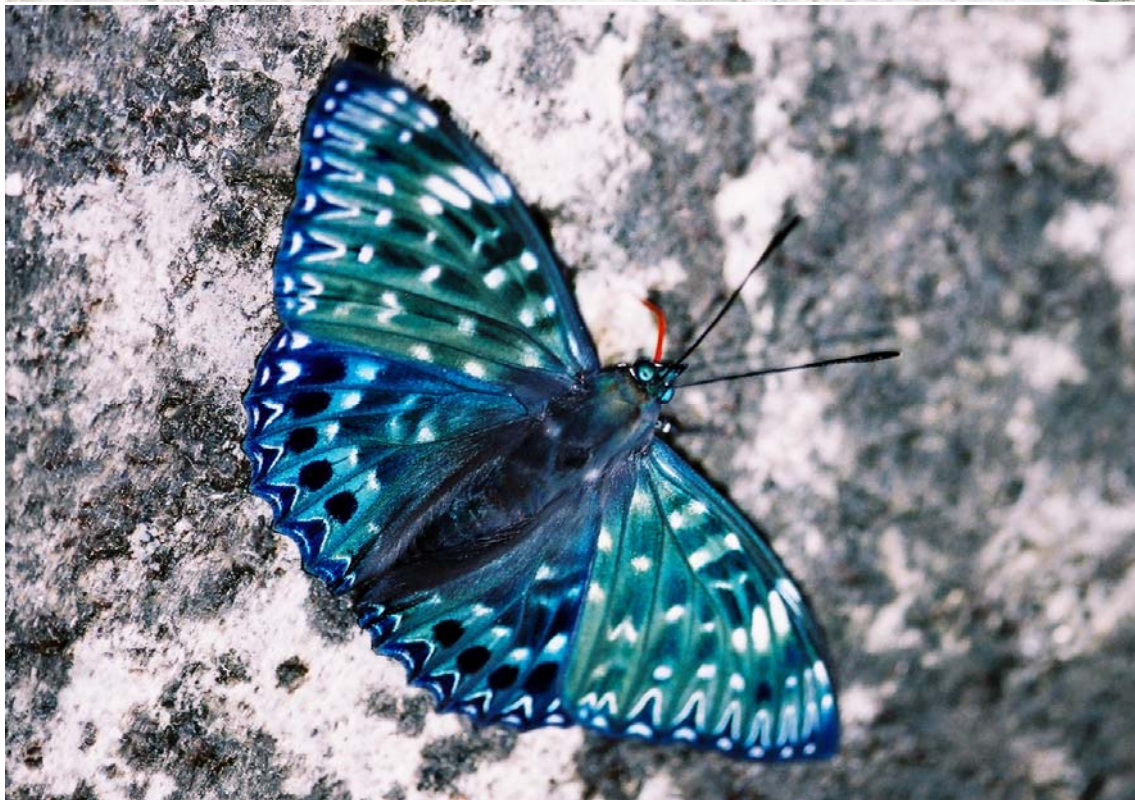
## 【Ⅱ】 色鮮やかに夏の草花

高温多湿の日本の夏を咲き続ける『多年草』は意外に少ない。暑さに耐えられても寒さには耐えられないものが多いからである。従って夏から秋にかけて咲く花の多くのは『一年草』である。朝顔、夕顔、月見草、向日葵、夏野菜のナスやキュウリの花にしてもまたしかりである。ことにナスやキュウリは原産地では多年草でありながら、日本では寒さに耐えられず、一年草になってしまうのである。このため夏を咲く多年草の中には、根塊になって地下で冬を越すものも少なくない。これはちょうど春に咲く多年草の多くが、球根となって夏を越すのと似ている。その代表的なものはカンナとダリア、あるいは水生植物のハスなどであろう。

一方、この季節ほど雑草が元気な季節は他にない。夏の一週間、畑をホッタラカシにしておいたら、草ボウボウになってしまう。しかしこうした植物も冬はすっかり枯れ込んでしまうところを見ると、この雑草もどちらかというとな方系の植物なのだろう。それはともかく日本の夏は高温多湿であるがために、雑草は家畜の餌として適さない。すぐに堅くなってしまい、飼料にならないのである。日本の牧畜が本州以南では根着かなかつたのも、こうした気候によるところが大きい。生き物というものは動物も植物も、多少の適応性があるといっても、自然の仕組みを乗り越えることはできないのである。

道具や化学肥料などのなかつた時代、農業はほとんどが自然に委ねられていた。雑草は生えるにまかされ、わずかばかりの耕作地だけがかろうじて除草されていたのである。だから原始人が農業を始めたときは、雑草との戦いであつたといつてもよいだろう。夏草がとかく差別的な用語によって呼ばれているのは、農業の敵と見なされたためだろう。しかしススキやエノコログサ(ネコジャラシ)など、この時季の雑草の多くは、世界中の人々が主食としているイネ科の植物であることは興味深い。逆にいえば、イネ科の植物はそれほど一般的であり、種類も多かつたからこそ、人間を今日まで養い続けることができたのだろう。

※単子葉と双子葉=被子植物においては根、茎、葉、花などの特徴によって、単子葉植物と双子葉植物に分けられている。単子葉植物は発芽したときの子葉が一枚で、根はヒゲ根が多く葉脈は平行に通っており、花卉は3枚かその倍数である。一方双子葉植物では子葉は2枚、根は主根と側根とがあつて四方へ伸び、葉脈は網目状になっており、花卉数は5枚もしくはその倍数であることが多い。



清流で川遊びする兄妹(長野県川上村)と、下はスミナガシ(群馬県上野村)。

この項に記されている植物のリスト
------------------

**【Ⅱ】色鮮やかに夏の花**

03-02-00-1

- |                              |            |
|------------------------------|------------|
| 1) クサキョウチクトウ／オイランソウ＝花魁草      | 03-02-01-1 |
| 2) アサガオ＝朝顔                   | 03-02-02-1 |
| 3) ヒマワリ＝向日葵                  | 03-02-03-1 |
| 4) ダリア＝天竺牡丹                  | 03-02-04-1 |
| 5) カンナ                       | 03-02-05-1 |
| 6) ホオズキ＝鬼灯＝酸漿                | 03-02-06-1 |
| 7) トケイソウ＝時計草                 | 03-02-07-1 |
| 8) サギソウとトキソウ＝鷺草と鴉草           | 03-02-08-1 |
| 9) ハス＝蓮                      | 03-02-09-1 |
| 10) アサザ＝浅沙／蓴菜                | 03-02-10-1 |
| 11) ホテイアオイ＝布袋葵               | 03-02-11-1 |
| 12) スイレンとヒツジグサとコウホネ＝睡蓮と未草と河骨 | 03-02-12-1 |
| 13) クワイとオモダカ＝慈姑と沢瀉           | 03-02-13-1 |

<a href="#">目次に戻る</a>
-----------------------